資料紹介

盛　弘仁・盛　恵子著　**バオバブと砂漠：西アフリカ三国旅行記**　東京　明石書店　1998年　283p.

40日足らずで3カ国という駆け足旅行が本になるとは，アフリカという素材がいかに魅力的かということだろうか。本書でも，写真が決定的にものをいっている。

毎年外国旅行をしていた二人がアフリカに惹かれたきっかけはアフリカンミュージック，そこで二度目のブラックアフリカ行はマリ，セネガル，モーリタニア。

マリではガイドを雇い，“アフリカでもっとも伝統的なくらしが残っている”，仮面劇でも有名なドゴンの村を訪れ，フランス人観光客らと仮面劇を実際に見て，その迫力に圧倒され，次はほんとうの祭りの中で見ようと決意。1931年にフランスの人類学者グリオールが書いたドゴン神話研究書『水の神』――本書ではその一部を訳出し，性的イメージにあふれた神話，宇宙観をのぞかせてくれる。

挿入資料としてほかに，3カ国の小学校で使われているフランス語で書かれた社会科や理科の教科書を一部訳出。セネガルの小3の歴史教科書は，非常に世界的な文脈の中でセネガルの歴史を述べ，マリの小2の読本「アフリカ，わたしのアフリカ」では少年カリムの一人称の語りで，身の回りの人々，環境，仕事，生活を紹介。またアフリカ各地の村から，同年輩の子供がカリムに宛てた手紙で自分の村の話をする。アフリカ人同胞意識や国際性を幼い頃から育てようという教科書づくりの意図が窺える。

この新しいタイプの旅行者は，目的地やテーマ選択はきわめて自由でこだわりがない。しかし観察は鋭い。そして仕事は頭脳的で，綿密な共同作業。荷物でも，観察でも，交渉でも，分業体制をとり，限られた予算と時間で最大限の効果を上げようと工夫する。本の構成はやや自由奔放とはいえ，今後こんな形で多くの若者がアフリカに行き，観察し，また記録も残すことを期待したい。

（丹埜靖子）

世界地理大百科事典2：アフリカ　東京　朝倉書店　1998年　ii＋665p.

本書はWorldmark Encyclopedia of the Nations, 8th ed.（New York: Gale Research, 1995）として出版された全5巻（Vol. 1：United Nations, Vol. 2：Africa, Vol. 3：Americas, Vol. 4：Asia & Oceania, Vol. 5：Europe）のなかのVol. 2の翻訳である。他の4巻もこの世界地理大百科事典として刊行予定であるが，本書はその第1冊目として完成された。1999年に最後の卒業生を送り出す東京大学教養学科の名を惜しみ，同学科の理念の存続を願って翻訳作業が進められたとのことである。

本書の特徴は，アフリカ大陸および周辺海域の53カ国について，どんな小さな国に対しても最低8ページをさいて解説している点にある。どの国も1.位置，広さと領域に始まって，言語，宗教，政府，経済，教育，図書館・博物館など49.属領までの49項目について説明がある。百科事典では調べることのできない国もあるので，本書は日本語で記述されている貴重な文献といえる。

総監修者である田辺裕氏によると，日本はいまだに世界を知らない，「日本人は世界を知らないことを認識していない」という。外国に関する教育も，世界史は高校で必修となったものの，世界地理については，中学1年次に履修するだけで，大学に進学してしまう状況であるという。江戸時代末に開国した後も，日本で外国を認識するための研究の必要性が論じられるのはいつも何か事が起きてからであったという監修者の指摘には反論の余地がない。このような文献を日本人が書いて出版する力はないので，せめてこの資料を日本語で読めるようにして，将来に期待したいというのである。他巻も刊行が待たれる。参考までに，原書は1998年に9 th ed.が出版されている。

（鈴木陽子）

川端清隆・持田繁著　PKO新時代：国連安保理からの証言
東京　岩波書店　1997年
xiii＋244p.

PKO（国連平和維持活動）は，日本の安全保障政策，あるいは対国連政策を考える上で避けて通れない問題である。PKOという言葉に接する機会は増えても，それに対する理解が日本では十分に深まっていない。そうした問題意識を背景に，この分野を担当する２人の日本人国連職員によってこの本は書かれた。

本書において強調されるのは，PKOが確固たる枠組みを持った概念ではなく，その時々の政治状況に左右される「生成途上の概念」だということである。よく言えば「国際社会の英知」であり，悪く言えば「政治的即興」であるPKOに関わる場合，したがって，参加国がそれに対していかなる理念と役割を付与するのかという論点が不可欠になる。考えて見れば当然の指摘だが，技術論に矮小化されたPKO論議ばかり耳にするなかで新鮮に聞こえる。「現場」の常識を日本に知らしめた本書の意義は大きい。

また本書では，従来とは質的変化を遂げたとされる「冷戦後PKO」の事例として，ソマリアとルワンダのPKOの経験が詳細に論じられている。これは大変貴重である。紛争に対する国連の調停や介入が議論される際，ソマリアとルワンダの経験は常に参照される事例であるが，そこで国連がどのように行動したのか，行動に際して加盟国の間でどのような議論が戦わされたのかについて，残念ながら日本では十分に研究が進んでいない。本書の３分の２近くを占めるこの実証部分は，国連の資料を駆使して書かれており迫力に富んでいる。

本書の著者は国連職員であるが，PKO活動を客観的に記述しようとする姿勢は一貫しており，その試みは成功していると言ってよいだろう。本書が多くの人に読まれ，そしてこの分野の本格的研究がこれに続くことを望みたい。

（武内進一）

嶋田義仁著　優雅なアフリカ：一夫多妻と超多部族のイスラーム王国を生きる　東京　明石書店　1998年　256p.

「彼らは，ドレイである以前にムサでありジッダであった。王子である以前にムスタファでありアブバカールであった。……わたしは彼らを，研究の対象というよりは，同時代を生きるものとして，……わたしの心にはっきりと刻みつけてしまったようだ」。

著者にはすでに，同じフィールド――カメルーン国北部に位置するレイ・ブーバ王国――についての研究書『牧畜イスラーム国家の人類学』（世界思想社）がある。しかし，その研究書では「学術的な制約があって」，王国滞在期間をともに過ごしたムサ達，アブバカール達の暮らしを思いのままに描き出すことはかなわなかったという。滞在が終わって18年，研究書の完成から３年がすぎた。本書の中で，著者の長年の夢はついにかなえられたようだ。

全編にわたって記述はきわめて平易である。「ドレイ身分家臣に預けられて」暮らしていた著者の「わたし」は，「ドレイ」である友人達と毎日を過ごし，彼らの生活の実際の姿を確認する。「わたし」は，またある時は，友人のムサと散歩しながら王国の恋愛作法を学ぶ。「わたし」と「ムサ」の，「わたし」と「友人達」の経験は，しかし単なるエピソードに終わるのではない。日常の発見はただちにイスラームにおける奴隷制の考察に結びつき，ひいては王国の政治構造全体が語られることになる。一夫多妻制が女性にとって実は有利に働いているという著者の主張をいろどるのが，「わたし」が楽しみにしていた「粋な婆さんたち」との「嫌がらせごっこ」であったりする。読者は，「わたし」とその友人達が嬉々として日々活躍する様子を追体験しながら，レイ・ブーバ王国全体の仕組みをも知らされていく。

地図や図表，写真など図版が豊富なだけでなく，気候と植生，衣服，割礼などについては別途解説が付されている。読者の理解を助けるための工夫が随所に見られる作品である。

（津田みわ）